
リトルウィングの非日常

桜椿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

リトルウィングの非日常

【Nコード】

N4809W

【作者名】

桜椿

【あらすじ】

太陽王フハハ（殴 カムハーンを倒し、フラハ（殴 ワイナールの活躍によって、無事ナギサを生還させることが出来たリトルウィング。

そんな彼らの（非）日常とはいかに……

キャラクター崩壊が激しいため、キャラクターの崩壊が許せない方は今すぐブラウザバックしてください！！

キャラクター崩壊命令 シズル編（前書き）

あらすじの方、ちゃんと読んだかいー？（デュオ）

えーっと……（幽真）

・うぶでカナツチだけど、大人な雰囲気でかつこよさがある原作シズルファンの方は、今すぐ電源ボタン連打してください。

・ここにいるシズルは、究極の変態で面影が容姿と頭の良さしか塵並にないから。

まあ、腹くくったやつだけ続きを読みな。（幽真）

キャラクター崩壊命令シズル編

リゾート型コロニー、クラッド6。そして、このクラッド6を本拠地に置く軍事会社リトルウィング。今日も、平和な一日が始まった……

*

「うーっす！おはよー！」（エミリア）

「ああ……、エミリア……」（悠莉）

「悠莉！？どうしたの！？なんか暗いけど！？」（エミリア）

「いや、なんか身体が重くて……」（悠莉）

「重いつて……。朝っぱらから何しとんじゃワレエエエエエー！」
（エミリア）

「ぐはっ！ー！」（シズル）
エミリアの飛び蹴りがクリーンヒット。

「あんだ、バカ！？何朝っぱらから悠莉に抱き着いてる上にセクハラしてんのよ！ー！」（エミリア）

「セクハラではない、体調チェックを……」（シズル）
「抱き着いてる上に、ヤラシイとこ触っておいてよく言っわー！変態セクハラ魔ドS確信犯ストーリーカーが！ー！」（エミリア）

「誰がストーカーだ!!」(シズル)

「ストーカーだけ否定すんかい!!他は否定しないの!?!」(エミリア)

「他は言われ過ぎて慣れた。」(シズル)

「慣れかよ!!慣れるものなの!?!」(エミリア)

「悠莉、朝から大変だな……」(ナギサ)

「大丈夫だ。慣れたから……」(悠莉)

「そこは慣れたって、言っちゃダメEEEE!!」(エミリア)

キャラクター崩壊具合 シズル編（後書き）

えーっと、私の中で、一番崩壊が激しいキャラ。シズルの崩壊具合はこんな感じです（ー・ー・ー）

キャラクター崩壊具合／ヒューガ編（前書き）

はい。この話は、GRM社の若手社長ヒューガが題材だよー（デュオ）

うーん……。ヒューガもキャラ崩壊があるが、どちらかと言うと報われない……。 （幽真）

キャラ崩壊二割に対し、報われないが八割だもんねー（デュオ）

ああ……。まあ、これも腹くくったやつだけ続きを読みな。 （幽真）

キャラクター崩壊具合／ヒューガ編

「こんにちは、悠莉さん。」（ヒューガ）

「ん？ヒューガか？」（悠莉）

「はい。今日も相変わらずお美しい……。水の精、セイレーンが実在したとなれば、あなたのような美しさかもしれませんね。」（ヒューガ）

（水の精って……。私の髪と目が青いからか？）（悠莉）

「悠莉さん、よろしければこれから一緒にお茶でもどうですか？」（ヒューガ）

「それは……」（悠莉）

「悠莉、クラウチさんが呼んでるぞ？」（シズル）

「え？クラウチが？」（悠莉）

「……あの、いつからいたんですか……」（ヒューガ）

「僕はついさっき来たが？悠莉、行こう。」（シズル）
悠莉の腰に手を回す

「えっ！？あ、ああ……」（悠莉）

「……。ホントに、いつからいたのでしょうか……。というか、急

に現れたような気が……」(ヒューガ)

キャラクター崩壊具合〓ヒューガ編（後書き）

基本、ヒューガは報われない（^q^）

キャストって、キスより先にいけないような気がする。構造的に考えて。（前書

段々、前書きのネタも切れてきたよね（デュオ）

それ言っちゃダメだろデュオ……（幽真）

キャストって、キスより先にいけないような気がする。構造的に考えて。

「悠莉……」(シズル)

「えっ、シズ……」(悠莉)

「イチャついてねえで仕事しろオオオ!!」(クラウチ)
ナツクルでシズルをぶっ飛ばす。

「すまない、クラウチ。私からも人前ではやめろと言っているのだが……」(悠莉)

「だったら、もっと口すっぱく言っておけ。じゃなくて!アイツとイチャつくのやめろって言ってるんだ!」(クラウチ)

「お父さんハ、アンナ変態ト付き合うノハ許しまセーン!!」(チエルシー)

「誰もそう言っただろ!!」(クラウチ)

「誰もあなたのことだと言っただいよ。」(ウルストラ)

「Z I W B A W K U W W W」(デュオ)

「うるっせー!つか、なんでガーディアンズのお前がいるんだよ!」(クラウチ)

「いやー、ヒマだったからー」(デュオ)

「総合調査部がヒマになるわけねえだろ!!」(クラウチ)

「シャツチョサン、悠莉とシズルがまたラブラブシテルヨー」(チエルシー)

「いい加減にしるボンボンがアアアア!!」(クラウチ)

「ラブラブと言うより、セクハラにしか見えないが……」(幽真)

「捕まえる?」(デュオ)

「それが仕事だろ?」(幽真)

「でも、本人嫌がつてなさそうなんだよなあ……」(デュオ)

キャストって、キスより先にいけないような気がする。構造的に考えて。（後書

クラウチ（お父さん）は悠莉（娘）が心配で仕方がないようです
^ q ^
）

盗撮、盗聴、ストーカーを気付けないように出来る人はスパイになれると思う

キャラクター紹介始まるよー (デュオ)

とうとうネタを切らしたな。作者…… (幽真)

悠莉・インヴェナー^{ユウリ}

女性キャストのレンジャー。リトルウィング所属の傭兵。記憶喪失だったがダメ^r (殴 エミリアとの出会いによって記憶を取り戻し、世界を救う。シズルとの交際はこの頃から。どれだけセクハラ被害に会っても、あまり怒らない鈍さがある。

盗撮、盗聴、ストーカーを気付けないように出来る人はスパイになれると思う

『シズル？何してるんだ？』（ユート）

『写真さ。見るか？』（シズル）

『おう！……ん？ユーリがいっぱい……』（ユート）

『ああ、僕が撮ろうとするとタイミングよく入って来ちゃうからな。それだけだ。』（シズル）

*

「で、その一枚をもらったぞー！」（ユート）

「これって……。どう見ても盗撮じゃん！入ってくるってレベルじゃないよー！完璧狙っているじゃんー！」（エミリア）

「とうさつってなんだ？」（ユート）

「勝手にそのヒトの写真を撮ることー！いわば犯罪ー！悪いことよー！」（エミリア）

「悪いことー？シズル、悪いことしてるのか！？」（ユート）

「そつよー！さつさといらしめに行くわよー！」（エミリア）

*

「お前は完璧に包囲されているー。今すぐその首さぐさげなさぐい。」
（デュオ）

「包囲つて……」（シズル）
シズルの周りに、エミリア、ユート、ナギサ、デュオ、幽真が囲っている。

「あんた、何盗撮してんのよ!？」（エミリア）

「別に、盗撮など……」（シズル）

「いや、証拠あるから。」（デュオ）
悠莉が映ってる写真を出す。

「ユート!? アレは二人だけの秘密だろ!？」（シズル）

「自爆したwwwwww」（エミリア）

「えっ?」（シズル）

「ぎゅんねゅん コレは、悠莉に協力して撮ったものだよー」
（デュオ）

「謀ったな!？」（シズル）

「あんたが盗撮なんかしてるからでしょ!？」（エミリア）

「今ので完璧に罪状になったねー 悠莉ー! 来てー!」（デュオ）

「ええ!？」（シズル）

「……………」(悠莉)

(フラれたなあ。完璧に…………)(エミリア)

「盗撮は…………。欲求不満によって行う行動の1つだと聞く。その…………。なにか、不満があれば言ってくれても良かったのだが…………」(悠莉)

「えっ!?!」(全員)

「…………」(悠莉)

「…………、すまない。悠莉…………」(シズル)

「ちょっと!?!なんで盗撮許しちゃうのよ!?!」(エミリア)
小声。

「知らないし。恋は盲目って、正にこの事だね…………」(デュオ)
小声。

盗撮、盗聴、ストーカーを気付けなく出来る人はスパイになれると思う

悠莉のこれは、「鈍い」という言葉で収まるのだろうか……

無いより着痩せの方が悲しいと思う（前書き）

次は、俺たちの紹介だよー（デュオ）

幽真・イングラム^{ユウマ}

男性ヒューマンのプレイヤー。元々はガーディアンズだったが、リトルウィングに入社する。ビーストクォーターのため、半ナノブラストが可能。ボケが二人もいるため、基本ツツコミ役。

デュオエル・スイスル

男性ヒューマンのプレイヤー。ガーディアンズの総合調査部所属。純粋なヒューマンで、ニューデイズ出身。シズルとは従兄弟。腹黒ドSな性格。故意で行うのもしばしば。

無いより着痩せの方が悲しいと思う

「うーん……」(エミリア)

「どうしたのだ？エミリア……」(ナギサ)

「ハア……」(エミリア)

ナギサを見て溜め息をつく。

「……？」(ナギサ)

「ナギサもあるし……。悠莉もなあ……」(エミリア)

「どうしたの？エミリア。」(ルミア)

「悠莉とナギサが巨乳で羨ましいってこと。」(エミリア)

「えっ！？悠莉が！？リゾート地区の時は私たちより(ルミア)

「シャワールームだが……」(悠莉)

「御一緒にしても良いですか？」(ルミア)

「ああ。構わないぞ。」(悠莉)

「確かめてやる……！確かめてやるわ！」(ルミア)

*

「……」(ルミア)

脱衣所で服を脱ぎながら、悠莉をちらみする。

(しかし、年下のエミリアに負けるだなんて……)(ルミア)
自分の胸を見て絶望する。

「って、悠莉はやっ!」(ルミア)

悠莉がいないことに気付き、直ぐ様脱いでシャワールームに入る。

「あ、悠莉!……」(ルミア)

悠莉の裸体を見て絶句する

「ん?どうした?」(悠莉)

「な、な、な……」(ルミア)

「な?」(悠莉)

「なんで!?キャストも着痩せするの!?!」(ルミア)

「き、着痩せ?」(悠莉)

「……、失礼します!」(ルミア)

「ちょ、ルミア!?きゃあ!」(悠莉)

「うっ、手に余る程の質量……。キャストだから、仕方ないかもしれないけど……」(ルミア)

「ル、ルミア!あまり、揉むな!」(悠莉)

「うっ、なんでキャストも着痩せするのよ……」(ルミア)

「ルミア、いい加減に……」(悠莉)

「見た目が16歳くらいで、これだなんて……」(ルミア)

*

「わかった？悠莉が着痩せだったこと。」(エミリア)

「うん……。ナギサほどボリュームがあるわけではないけど、大きかった……」(ルミア)

「まあ、ナギサにボリュームで負けたことは気にしてるみたいけど……」(エミリア)

「そういえば、悠莉の歳は……」(ルミア)

「えっと、もう二十歳のハズ……」(エミリア)

「二十歳なのに、16歳の姿……。違反してるわ!」(ルミア)

「悠莉も見た目が幼いこと、背が低いこと気にしてるけどさ……」(エミリア)

「変えないの?」(ルミア)

「本人は二十代にしてくれ。って言ってるけど、シズルが許さないからさあ……。あいつを無視してやろうとすると、かなりうるさい

し……」(エミリア)

「本当に、変態なのね……」(ルミア)

「今更だつつの。あの変態セクハラ魔ドS確信犯ストーカーにとつては、セクハラとストーカーが日課だもん。」(エミリア)

「止めないの!?!」(ルミア)

「あいつ、無駄に強いから止められないし!出来るのおっさんくらいだもん!」(エミリア)

「こんな時に不便ね。悠莉と互角なのが……」(ルミア)

「うん……」(エミリア)

「悠莉って、彼のどこが良かったんだろう……」(ルミア)

「それは言える。今となってはね……」(エミリア)

無いより着痩せの方が悲しいと思う（後書き）

悠莉は着痩せをする話。事実、ゲームでレギュラースイムを着せたら、レウスイノセンテと比べた結果、着痩せしたorz

PSP02のローゼンシュベルトでも着痩せするんだよねあ……

キャストもキャストなりに悩みはある。(前書き)

甘く、したつもり……(――;))

キャストもキャストなりに悩みはある。

「悠莉、いるか？」（シズル）
悠莉の自室前。

「ん？どうかしたか？」（悠莉）

「いや、少しな。」（シズル）

「……？」（悠莉）
シズルを自室に入れる。

「どうかしたのか？」（悠莉）

「特に何も。」（シズル）
座っている悠莉を背後から抱き締める。

「ん？」（悠莉）
少し首をひねってシズルの表情を伺う。

「二人つきりだと、怒らないんだな。」（シズル）

「人前だと、恥ずかしい……」（悠莉）

「そうか？僕はあまり気にならないが……」（シズル）

「恥ずかしいだろ。こんな密着した状態で……」（悠莉）

「そうか？」（シズル）

悠莉の太股を撫で始める。

「んっ……」(悠莉)
少し身体を震わす

「かわいい。本当に……」(シズル)
耳元で囁く

「っ……」(悠莉)

「まあ、こんな姿を他人に見せられたくないよな。僕自身、こんな色っぽい悠莉を他の男に見せたくない……」(シズル)
両手が腰から脇腹辺り向かって撫でる

「あ、ハア……」(悠莉)

「でも、君はキャストだから……」(シズル)
悠莉の胸の下で腕を組む。

「すまない、いつも……」(悠莉)

「いいんだ。むしろ、君がキャストだからこそ、まだこうしてられる……」(シズル)

悠莉の瞼に唇を当てる。

「っ……」(悠莉)
シズルが唇を離すと、悠莉から唇をシズルの唇に重ねる。

「……、珍しいな。」(シズル)
唇が離れてから、優しく微笑む。

「うるさい……」(悠莉)
少し顔を俯かせる。

「御主人様、只今戻りましたって……、何しとんじゃ己はア!」
(ステラ)

悠莉の部屋に入った途端に、シズルと悠莉の状態を見て、銃を構える。

「おつと。ここでそんなもの撃っていいのか?」(シズル)
悠莉から離れる。

「だったら表出る!ミンチにしてやりゃ!」(ステラ)

「パートナーマシナリーが、そんな口調で良いのか?」(シズル)

「るせー!テメエのせいだろ!」(ステラ)

「はいはい。それじゃ。」(シズル)
悠莉の部屋を出る。

「御主人様、あんな変態セクハラ魔ドS確信犯ストーカーを、今すぐ抹殺しますからね!」(ステラ)
ステラも部屋を出る。

「……」(悠莉)
一人茫然とする。

(生身の身体なら、あんなに我慢させることは無いんだけどな……)
(悠莉)

机に突っ伏して、心の中で小さく呟いた。

キャストもキャストなりに悩みはある。(後書き)

ステラは御主人様に害なす奴には容赦ないです(^q^)

チビ化って、シヨタコンとロリコンだっちはおいらのもの。(前書き)

チビ化してみた(^ q ^)

チビ化って、ショタコンとロリコンにとってはおいしいもの。

こんにちは。こんばんはか、おはようかもしれないが、とりあえず
こんにちは。青髪ツインテールキヤス娘こと、悠莉・インヴェナー
だ。

今、私の目の前には非常に大変なことが起きた。それは何かって？

エミリア、ユート、ルミア、ナギサの四人の身体がちっちゃくなっ
たんだ……

事の始まりは、数分前……

*

『エミリア、何をしているんだ？』（悠莉）

『いやあ……。ちょっと、ガーディアンズに頼まれてさ……。』（エ
ミリア）

『だからルミアもいるのか。』（悠莉）

『ええ。エミリアが余計なことしないように見張るよう頼まれてい
るから。』（ルミア）

『それ、余計な一言なんですけど……。』（エミリア）

『事実でしょ？』（ルミア）

『エミリア、エミリア！！何しているんだ！？』（ユート）

『あ、ユート！走り回るな！』（エミリア）

『悠莉、クラウチが呼んでいるぞ。』（ナギサ）

『あぁっ！』（エミリア）

ガタッ！！ポチャっ、ドガアアアン！！！！

ユートが走り回ったことにより、薬品が入ってる瓶やら箱やらが倒れて、エミリアが調整していた薬品に混ざり、小さな爆発が起きた。

『ケホッ、ケホッ……。大丈夫か！？』（悠莉）

密室の中には煙がもうもうとしているが、換気扇が回っていたため煙が次第に晴れていく。

『ちょっと！ゆーと！だからはしっちゃダメっていったじゃない！

！』（エミリア？）

『う、ごめんなさい！』（ユート？）

『なんか、してんがひくいのだが……。』（ナギサ？）

『そうですね……。』（ルミア？）

『……。』（悠莉）

煙が晴れた先には、エミリア、ユート、ナギサ、ルミアとおぼしき子供が四人いた……

そして、現在に戻る。

「じゃあ。あたしたち、ちっちゃくなっちゃったの？」（えみりあ）

「まあ、な……」（悠莉）

「からだがちいさくなったせいで、ふくが……」（なぎさ）

「待ってる。今、ウルスラとチエルシーを呼ぶから……」（悠莉）
通信機を操作する。

数分後

「これはまた……」（ウルスラ）

「ちっちゃくなったエミリアたち、スッゴクキュートネ!!」（チエルシー）

「一番の問題は服ね……。これなんかどうかしら？」（ウルスラ）
幼稚園児の服を取り出す。

「それきるー!!」（えみりあ）

「ぼくもー!!」（ゆーと）

「いいのか、それで……」（悠莉）

*

そして幼稚園児の服を着た、えみりあ、ゆーと、なぎさ、るみあが完成した。

「ホントにベリーキュートネー!!」(チエルシー)

「ちゃんと戻れるのか？」(悠莉)

「そこは検査しないとね……」(ウルストラ)

「何とも言えないか……」(悠莉)

「いちおう、ちょーごーしたくすりは、ぜんぶこうかがみじかいやつだよ？」(えみりあ)

「だからって、ほつといても大丈夫じゃないような気が……」(悠莉)

「とりあえず、検査しましょう。エミリアたち、着いてきなさい。」(ウルストラ)

「はい。」(えみりあ、ゆーと、なぎさ、るみあ)

*

「エミリアたち、大丈夫だろうか……」(悠莉)

「ソウイエバ、悠莉は平気ナノネ。」(チエルシー)

「どうやら、キャストには効果は無いようだ。」(悠莉)

「…………」（ウルスラ）
検査室から、エミリア達を連れて出てくる。

「ドウ？ウル…………」（チエルシー）

「あんまり芳しく無いわ……。エミリアが調合していた薬品や、元々作ろうとしていた薬品から調べないと……。でも、身体が小さくなった意外は、身体的影響は無いわ。」（ウルスラ）

「原因がわかるまで、エミリア達はどうする？」（悠莉）

「私やチエルシーは原因を探るから、あなたが面倒を見て頂戴。これ、決定事項。」（ウルスラ）

「わ、わかった…………」（悠莉）

「一人がタイヘンなら、誰かにお手伝い頼んだら？」（チエルシー）

「スケッチはもう呼んだわ。そろそろ来るわね…………」（ウルスラ）

「…………」（シズル）

「えっ！？シズル！？」（悠莉）

「しずるでかつー！」（えみりあ）

「しずるー！かたぐるまー！」（ゆーと）

「大体の事情はウルスラさんから聞いている。原因がわかるまで、僕たちが面倒を見るんだろ？」（シズル）

「あ、ああ……」(悠莉)

「後はヨロシクネー」(チエルシー)

チビ化って、シヨタコンとロリコンにとってはおいしいもの。(後書き)

ちょっとしたシリーズものにしたいと思います。

書いて欲しい話を募集しますm(_____)m

子供の仕事は、よく遊びよく寝ること。（前書き）

チビ化シリーズ開始（ハ・ハ）

子供の仕事は、よく遊びよく寝ること。

「さて。任されたものの……。どうすればいいのだろうか……」
(シズル)

「なんか、したいこともある?」(悠莉)
えみりあ達に、視点が合うようしゃがむ。

「うーん……」(えみりあ)

「あそびたいぞー!!」(ゆーと)

「そうだな。からだはうごかしたい。」(なぎさ)

「じゃあ、鬼ごっこでもしようか。」(悠莉)

「はいー!!」(えみりあ、ゆーと、なぎさ、るみあ)

「私が鬼になるから、みんな逃げる準備はいい?」(悠莉)

「おうー!!」(ゆーと)

「そうかんたんにはつかまらないわよー!!」(えみりあ)

「よし、はじめ!」(悠莉)
はじめの掛け声と共に、手を叩く。それと同時にえみりあ達が四方八方に走り出す。

「おにさんこちらー」(えみりあ)

「まて〜！」（悠莉）

「……」（シズル）

僕は思わず驚愕した。悠莉が、あんな小さい子の面倒を見るのが得意だなんて……。現にあの鬼ごっこも、わざと彼女は加減している……

「それ！」（悠莉）

「べー！ざんねんでしたー！」（えみりあ）

「今度はちゃんとつかまえるぞ〜！」（悠莉）

子供に翻弄されながらも、彼女はとても楽しそうだ。そういえば、保育士の資格を取ったと言っていたな……

「つかまえた！」（悠莉）

「うわっ！？」（ゆーと）

「つぎ、ゆーとがおにー！」（えみりあ）

子供と戯れる悠莉が、何とも可愛らしい。あんな笑顔、ほとんど見たことが無いからな……

「……」（なぎさ）

ん？ナギサが僕の足を触っているが、どうしたんだ？

「しずるがおにだぞー!!」(ゆーと)

「ほら!はやくしてよー!」(えみりあ)

どうやら、僕が鬼のようだ。仕方なく僕はエミリア達を追い掛けることにした。しかし、エミリア達は非常にすばしっこい。つかまえようとすると、すぐ逃げられる。

「ぼくはここだぞー!!」(ゆーと)

「いがいとろいのねー!!」(えみりあ)

本音を言えば、屈みながら走るのは少しキツイ。こんな時に自分の身長が憎たらしく思う。

「でも、すこしつかれてきた……」(るみあ)

ルミアが欠伸をした途端、他のエミリアやユート、ナギサまでもが欠伸をして眠そうだった。

「やれやれ、少し疲れちゃったか。」(悠莉)

悠莉が、エミリアとユートを抱き抱えた。さすがにもう二人も持たせるわけにはいけないから、ルミアとナギサは僕が持つことにした。

*

僕達が向かったのは、悠莉のマイルームだった。行く途中で、四人とも眠っていた。そして、悠莉は四人を自分のベッドに寝かせた。

「なんだろうな……。」「親」というのは、こんな感じだろうか……」
（悠莉）

「そうだな。君は保育士と言うより、母親に近かったな。」（シズル）

もし、彼女が子供を産んだらこんな感じなんだろうな……

「母親、か……。まあ、そんなのには永遠になれないと思うがな……」（悠莉）

寂しそうに呟いている割には、眠っているエミリア達の頭を撫でる仕草は、とても優しい手付きだった。

「母親になれなくとも、妻にすることなら出来るぞ？」（シズル）

「そうだな……」（悠莉）

すると、一瞬間が空いた。

「悠莉？」（シズル）

「な、な、な……！何言い出すんだバカノノ！！」（悠莉）

「えっ？」（シズル）

「妻にするって、意味をわかって言っているのかノノ！！？」（悠莉）

「さすがに、その意味はわかっているぞ。」（シズル）

「……／／／」（悠莉）

この会話を全く別の人物が盗み聞きされていたことを、二人は知らない。

子供の仕事は、よく遊びよく寝ること。（後書き）

バカップル……（デュオ）

つか、なんで俺たちがあいつらの行動を記録しないといけないんだよ……（シグレ）

ノートに今日の行動をまとめる

仕方ないだろ……。頼んだ相手が相手だし……。 （ヴァイスライド）
盗み聞きから戻ってくる

俺たちみんな、チエルシーに脅されたってことだよ……。 （幽真）

……。 （全員）

肉体どころか、精神も幼稚化したようです。(前書き)

チビ化が深刻な状態になりました(＾q＾)

肉体どころか、精神も幼稚化したようです。

ん

さん

おかあさん……

おきて！おかあさん！

「うつ、ん……」（悠莉）
ゆっくりと目を覚ます。

「おはよー！おかあさん！」（えみりあ）

「おねぼーさんだぞー！」（ゆーと）

「おなかすいた……」（なぎさ）

「ああ、ごめんね。ごはん、すぐ作るから……」（悠莉）
その瞬間、悠莉の中に何かが引っ掛かった。

「おかあさん……？」（悠莉）

「あ、起きたか。」（シズル）
悠莉のマイルームに入ってくる。

「おとうさん！」（るみあ）

「お、おとうさん!？」（シズル）
ただひたすら、悠莉とシズルは驚愕した。

*

「ちっちゃくなつたことは聞いていたが、まさか本格的に幼児退行するとはな……」（クラウチ）

「ああ……。私たちを親だと思い込んでいるようだ……」（悠莉）
現に、悠莉の周りに幼稚園児×4が群れている。

「まあ、お前を母親と思い込むのはいいが。なんであいつが父親と思ひ込まれているんだよ!!」（クラウチ）
クラウチが納得していないのは、シズルが父親と思ひ込まれているところだった。

「そう言われましても……」（シズル）

「おとうさんをいじめるなー!!」（ゆーと）

「いじめるなー!!」（えみりあ）
シズルの前に四人が立ち始める。

「いじめてねえよ!!たく、調子狂うな……。とりあえず、調査に回ってるウルスラたちに連絡入れとくぜ。」（クラウチ）

「ああ、頼む。」（悠莉）

「おかあさん、おはなしおわり?」（るみあ）

「うん。終わりだよ。」（悠莉）

「だったらあそぼ！！かくれんぼ！！」（ゆーと）

「はいはい。」（悠莉）

幼稚園児に囲まれながら移動。

「母親が板についてるな……」（クラウチ）

「そう、ですね……」（シズル）

「……？オイ、どうした？」（クラウチ）

「心配してくれるんですか？」（シズル）

「ち、ちげえよ！！」（クラウチ）

「彼女は、母親になんか永遠になれないって、気にしていました。」
（シズル）

「あいつ、まだ気にしてるのか……。血が繋がってなくとも、俺たちは「家族」と言える間柄なのによ……」（クラウチ）

「血の繋がりが、か……」（シズル）

「確かにあいつはキャスト。子供は産めない身体だ。でも、今まで紡いできた絆は、種族なんて関係ないだろ……」（クラウチ）

「……」（シズル）

「あー！だからって、付き合いは許さねえぞ！」（クラウチ）

「どっちなんですか……」（シズル）

「るせー！俺は認めないぞ！」（クラウチ）

「おとうさんー！！おかあさんがみつからないよー！！」（るみあ）
涙目で駆けてくる。

「ええ！？」（シズル）

「おかあさん、すぐみつかるからうまくかくれてよね。っていったらみつからなくなっちゃったー！！」（えみりあ）
泣き出す。

「わ、わかった！大丈夫、お母さんはすぐ見つけるよ。」（シズル）
なれないながらも、優しく微笑む。

「ほんと！？」（えみりあ）

「ああ。見つかるまでは、あのおじさんと遊んでおいで。」（シズル）
クラウチの方を見る。

「はいー！！」（えみりあ、ゆーと、るみあ、なぎさ）

「よし、いいこだ。」（シズル）
走り出す。

「おっさんー！！なにしてあそぶのー！？」（えみりあ）

「あそぶのー!?!」(ゆーと)

「うーん、そうだなあ……。よし、スパイごっこだ!」(クラウチ)

「すばいっご?」(なぎさ)

「お前ら、お父さんに気付かれないように着いていくんだ。」(クラウチ)

「はいー!」(えみりあ、ゆーと、るみあ、なぎさ)

「元気が良いのはいいが、スパイは気付かれないようにしないとダメだぞ?小さい声でな。」(クラウチ)

「はい。」(えみりあ、ゆーと、るみあ、なぎさ)

*

シズルは、迷いもなくテラスに向かった。こんな時に彼女が隠れそうな場所は1つしかない……

「悠莉……」(シズル)

「シズルか、すまない……」(悠莉)

「エミリアたちが泣きながら探していたぞ?」(シズル)

「ああ……、すまない……」(悠莉)

「まだ気にしているのか？自分が本当の親じゃないことを。」（シズル）

悠莉の隣に立つ。

「親がない悲しさを、もう一度味わせるわけにはいかないからな……」（悠莉）

「やっぱり、優しいんだな……」（シズル）

「えっ？」（悠莉）

「悲しませたくないなら、僕たちがちゃんと務めを果たすべきだ。ただ、それだけじゃないか……」（シズル）
悠莉を優しく抱き締める。

「すまない。弱気になっていたな……」（悠莉）

「親になるというのは、大体そうだろう。」（シズル）

「そうかもしれないな……」（悠莉）
二人は互いに微笑んだ。

*

「らぶらぶだあ」（えみりあ）

「えみりあ、しー。だよ。しー。」（るみあ）

「おとうさんとおかあさん、なかよしなかよし！」（ゆーと）

「ゆーと、うー。」（ななむね）

と、観察する幼稚園児×4がいた。

肉体どころか、精神も幼稚化したようです。（後書き）

「もう、申し訳ないといしかいえねえよ……」（シグレ）

「はぁ……」（ヴァイスライド）

「ダメだ。あのラブラブぶりにやられてる。」（デュオ）

「悠莉とシズルがバカカップルなのは、もうあきらメロンの領域だぞ。」（幽真）

*

「みんな、壊れかけているようネー……」（チエルシー）

「当たり前でしょ。あんな甘ったるいのをずっと記録させたら、彼らが参っちゃうわ。」（ウルスラ）

子供も大人も、共通の敵は黒く光る触覚があるアレ（前書き）

オンドウル侍さんの、仮面ライダードラゴンナイト 翼を抱いた鏡の戦士に登場するアレンとリイマジレンが登場します（<―>）

余談ですが、このネタが出来る前日に、風呂入ってる時に出現したのでやりました（^q^）

子供も大人も、共通の敵は黒く光る触覚があるアレ

「く、くるな……」(なぎさ)
後退りをする。

「くるなああ!!」(なぎさ)
パノン・ヌイミを強く抱き締め、力の限り叫ぶ。

「どうしたの? なぎさ。って、いやああああ!!」(えみりあ)

「えみりあ、しずかに。って、きゃああああ!!」(るみあ)

「どうした? みんな?」(ゆうと)

「みんな、どうしたの? って……」(悠莉)
女性陣はみな硬直した。なぜなら……

彼女たちの前に、黒く光る触覚があるアレ。Gがいたのである。

「おかあさん! アレなんだ!?!」(ゆうと)

「近付いちやダメええええ!!」(悠莉)
ユートを持ち上げる。

「おかあさん……」(えみりあ)
涙目で見上げる。

「おかあさん……」(るみあ)
涙目で見上げる。

「ごめん、アレだけは……」(悠莉)
身体をガクガクと震わせている。

「どうしたんだ？悠莉……」(アレן)

「アレן！？それにレンも！！」(悠莉)

「な、なんで泣きそうなんだ！？」(アレן)

「アレを見て何とも思わないのか！？」(悠莉)
Gに指をさす。

「落ち着け。たかが害虫だろ。」(リイマジレン)
カードを構える。

「レン？」(アレן)

「KAMEN RIDER！！」(リイマジレン)

「へんしんした！！」(ゆうと)

「かつこいいー！！」(えみりあ)

「ちよっ！？レン！？」(アレן)

「FINAL V」(リイマジレン)

「落ち着けええええ！！アンタが落ち着けええええ！！」(アレן)

レンを取り抑える。

*

「うう、早く去ってくれ……」(悠莉)
幼稚園児×4を守るように腕を回す。

「全くだ。」(リイマジレン)
変身を解く。

「ホント、早く去ってくれないかな……」(アレン)
レンの暴走を取り抑えてたため、全身ボロボロ。

Gはまだ、廊下をカサカサと右往左往していた。

「ぼく、あいつやつつける……」(ゆーと)
悠莉の腕からすり抜ける。

「あつ!?! ユート!!」(悠莉)

「ぐぬう……」(ゆーと)
Gの前に立つ。

Gは触覚を動かす。

「むうう……」(ゆーと)

Gが翼を広げる。

「っ!?!」(ゆーと)

Gは宙に羽ばたく。

「うわああああ!!」(ゆーと)
逃げ出す。

「Gが、ヤツが飛んだだとオ!?」(リイマジレン)

「だからって、カード構えるなあああ!!」(アレン)

「なんなんだ、この騒ぎは……」(シズル)

「シ、シズル!!」(悠莉)

「おとうさん!!」(幼稚園児×4)

「ど、どうしたんだ……」(シズル)

「いや、ヤツが……」(アレン)
Gに指をさす。

「……………」(シズル)
グレンを構える。

「お、おい……………」(アレン)

「……………」(シズル)

地に降りたGに近付き、グレンを突き刺す。

「さ、刺した……………」(アレン)

「後で洗淨しないとな……」(シズル)
グレンをナノトランスでしまう。

「おとうさん!!」(幼稚園児×4)
シズルに群がる。

「すまない、助かった……」(悠莉)

「ふふ、女性らしくてかわいいよ。」(シズル)

「……／＼／」(悠莉)

「俺たち、忘れられてる……?」(アレク)

「お父さんとお母さんって……」(リイマジレン)

「え?今更ツツコミ?」(アレク)

後日、ステラが一人でG殲滅作戦を遂行しましたとさ。

子供も大人も、共通の敵は黒く光る触覚があるアレ（後書き）

「あいつら、イチャつくのが日課なのか？」（シグレ）

「……」（ヴァイスライド）

「Gの討伐かぁ……」（デュオ）

「ステラ、お疲れ様。そして、オンドウル侍さん。アレンとリイマ
ジレンがあんな事になって申し訳ありませんでした。」（幽真）

遊園地は、なんやかんやで大人が一番楽しんでいるような気がする（前書き）

とつとつちび達が外出します（・・）

遊園地は、なんやかんやで大人が一番楽しんでいるような気がする

『ゆうえんちいきたい!!』(えみりあ)

『いきたい!!』(ゆーと)

『え? 遊園地?』(悠莉)

『うん!!』(えみりあ)

『じえつとこーすたーにのりたい!!』(ゆーと)

『わたしはかんらんしゃ!!』(るみあ)

『あとらくしゅん、せいはする……』(なぎさち)

『うーん、お父さんをお願いしてみようか。』(悠莉)

『おねがいするー!!』(えみりあ)

『するー!!』(るみあ)

*

そして、子供達の要望に答え、遊園地。

「おつきー!!」(ゆーと)

「ひろーい!!」(えみりあ)

「ユート、エミリア！勝手に行っちゃダメ！」（悠莉）
走りだそうとするえみりあ達を止める。

「えみりあ！ゆーと！めっ！！」（るみあ）

「……………」（なぎさ）

「半分は大人しくて、本当に助かる……………」（シズル）

「まあ、な……………」（悠莉）

「じえつとこーすたー！！じえつとこーすたー！！」（ゆーと）

「こーひーかつぶいきたいー！！」（えみりあ）

「はいはい。順番、順番。」（悠莉）

*

「ごめんねー、ぼく。ジェットコースターは、このバーより小さい子は乗れないんだ。」（スタッフA）

ゆーとの身長が、目安バーに届いていない。ちなみに。目安バーは163cmの悠莉と比べると、ちょうど胸辺り。また、ゆーとの身長は悠莉の膝辺りしか無い。

「えー！？やだやだやだー！！」（ゆーと）

「こら、ユート！」（悠莉）

駄々をこねるユートを立たせる。

「じえつとこーすたーのりたい……」(ゆーと)

「じゃあ、大きくなったら乗ろうか。」(悠莉)

「ほんと!?!」(ゆーと)

「うん。」(悠莉)

「やくそくだぞ!?!」(ゆーと)

「うん。約束するよ。」(悠莉)
指切りをする。

*

「こーひーかつぷー!?!」(えみりあ)

「あんまり回すなよ?」(シズル)

「よせ。エミリアのことだ。」(悠莉)
そして、コーヒークップが動き出す。

「そーれー!?!」(えみりあ)

「うわっ!?!」(シズル)

「うっ!?!」(悠莉)

「めが、めがまわるー!?!」(ゆーと)

「きゃああああー!!」(るみあ)

「っ……」(なぎさ)

パノンヌイミが飛ばされないように、強く抱き締める。

そして、一人の女の子の笑い声と二人の子供の悲鳴が響いた……

*

「たのしかったあー」(えみりあ)

えみりあのみ、ルンルン気分で降りるが、他のゆうと達、悠莉達はぐったりしている。

「コーヒークップは、あんな危険な物だったとは……」(シズル)

「いや、エミリアが間違ってるだけだ。絶対に。」(悠莉)

「おとうさーん!!おかあさーん!!あれ乗りたいーい!!」(えみりあ)

「ええ!?!」(悠莉、シズル)

子供に振り回される保護者(親)であつた……

*

「かんらんしゃー!」(るみあ)

「もう、観覧車で終わりにしようか。」(悠莉)

「えー！？まだあそびたいー！！」（えみりあ）

「ぼくもー！！」（ゆーと）

「そろそろ帰らないといけないから、観覧車で最後。いい？」（悠莉）

「はい……」（えみりあ、ゆーと）

「帰ったら、プリン作るから。」（悠莉）

「ぷりん！？たべるたべるー！！」（ゆーと）

「はやくかんらんしゃのろー！！」（えみりあ）

「現金だな……」（シズル）

*

「はいー！楽しんでくださいねー！！」（スタッフB）
観覧車が動き出す。

「わああー！！」（るみあ）

「たっかいー！！」（えみりあ）

「もっとたかくなるぞー！！」（ゆーと）

今、席順は保護者と子供に別れていた。

「……」（なぎさ）

こつくり、こつくりとする。

「うーん、ねむい……」(ゆーと)

ふああ。と欠伸をする。すると、他のルミアとエミリアも欠伸をし、四人共眠り始めた。

「疲れた……」(シズル)

「それはエミリアたちと同じだろ。でも、今日は本当に楽しかったんだろうな。笑ってる。」(悠莉)

目の前の四人が、笑いながら眠っている。

「そうだな……。悠莉……」(シズル)

悠莉の方に向く。

「えっ……？っ！？」(悠莉)

シズルと唇が重なる。

「……っ、……」(シズル)

「ん……、ふう……」(悠莉)

そして、ゆつくりと離れた。

「子守りが忙しくて、なかなか。」(シズル)

「うん……」(悠莉)

「積極的だな。まあ、その方が好都合だが……」(シズル)

「好きにしても、構わない……」(悠莉)

「じゃあ、御言葉に甘えて……」(シズル)

「お疲れ様でしたー！！忘れ物がないようにー！！」(スタッフC)

「……………」(悠莉、シズル)

*

眠った子供達を連れ、クラッド6の悠莉のマイルーム。

「まだ眠ってる。ホントに疲れたんだな……………」(悠莉)
子供達をベッドに寝かせる。

「全く。大人しくしていればかわいいのに……………」(シズル)
えみりあのほっぺを突つつく。

「なあ……………」(悠莉)

「ん？どうした？」(シズル)

「…………。今日から、一緒に寝てくれないか？」(悠莉)

「え？」(シズル)

「朝起きた時に、いつも言うんだ。お父さんはどこ？って…………。研究に忙しいのはわかっているが……………」(悠莉)

「寂しい。ということか。」(シズル)

「……」(悠莉)
こつくりと頷く。

「わかった。」(シズル)

「いいのか……?」(悠莉)

「ああ。」(シズル)

「ありがとう。」(悠莉)

翌朝から、六人で仲良く眠る姿が見られるようになった。

遊園地は、なんかかんやで大人が一番楽しんでいるような気がする（後書き）

「……………」（シグレ、ヴァイスライド）

「あーあ、撃沈してる……………」（幽真）

「まあ、今回ばかりは仕方ないさー」（デュオ）

子供も大人も含めて、みんなの人気者。その名も……（前書き）

タイトルでわかりますよね？
誰が出るか……（^-^）／

子供も大人も含めて、みんなの人気者。その名も……

「ぐぬう……」(マガシ)

「おじさん」(るみあ)

「おじさん！あそぼー！」(ゆーと)

「おじさん！たかーい！」(えみりあ)
マガシの頭の上に乗ってる。

「……」(なぎさ)

今、かつては最強(凶)最悪と謳われたあのレンヴォルト・マガシが……

ユニバースで、苦戦した方々が多い……

イルミナスで、大量発生して数多のプレイヤーをイラッ とさせ……

最近では、抹殺計画にて数多のプレイヤーにレベル上げの土台にされているあのレンヴォルト・マガシが……

幼稚園児×4に戯れているのである。

なぜこうなったのかは、数十分前……

＊

『え？かなり忙しいのか？』（悠莉）

ああ。今日はクラッド6に寄れるかどうかわからない。すまない
……（シズル）

『気にするな。ああ、大丈夫だ。』（悠莉）
通信を切るが、新しい通信が入る。

『どうした？』（悠莉）

わりい、今すつげえ人手が足んねえんだ。
（クラウチ）

『幽真たちは？』（悠莉）

幽真、シグレ、ヴァイスライドは揃ってチエルシーの調査に引ッ
張られてるし、マミはグラール教団に戻ってるからな……。セイロ
ウ、海音^{カイト}、鈴音^{リオ}、月姫^{ツバキ}、ダンにも回してるが……（クラウチ）

『それでもキツいのか。わかった。すぐいく。』（悠莉）
通信を切る。

『おかあさん、おしごと？』（えみりあ）

『うん。ごめんね……。』（悠莉）
幼稚園児×4の頭を、一人ずつちゃんと撫でる。

『御主人様！私にお任せを！』（ステラ）

『じゃあ、頼むぞ。』（悠莉）

*

と、ステラが孤軍奮闘している所にマガシが運悪くやってきたのである。そして、マガシを見掛けた途端に幼稚園児×4の表情が晴れやかになり、この有り様である。

「すみません、マガシ様……。ああ！！エミリア様！危ないです！」
（ステラ）

「なんでー？たのしいじゃん」（えみりあ）

「エミリア・パーシバル！！私の頭から降りろ！！」（マガシ）

「えみりあ！おじさんにめいわくだよ！めっ！」（るみあ）

身体も心も幼くなっても、ルミアはルミアであった。

「はい……。うわあ！？」（えみりあ）

マガシから降りようとしたら、足を滑らせる。

「えみりあ！！」（ゆーと）

「エミリア様！！」（ステラ）

誰もが絶望に陥った。このままでは、宙に浮いた小さな身体は重力（ここはコロニー内のため、正確にはコロニーの回転による遠心力）に従って、地面に叩き付けられてしまう。幼稚園児×3もステラも目を閉じた。

だが、どれだけの時間が経っても、落ちた音がしなかった。

「エミリア様……？」（ステラ）

「気を付けろ、エミリア・パーシバル……」（マガシ）

なんという事か。あのマガシが落ちるエミリアを受け止めたのだ。

「ありがとう！ーおじさん！ー」（えみりあ）

「おじさんではない！ーレンヴォルト・マガシだ！ー」（マガシ）

「ありがとう！ーまがしおじさん！ー」（えみりあ）

名前を言っても、結局は「おじさん」と呼ばれる。それに諦めたのか、マガシは何も言わなかった。

*

「ただいまー。」（悠莉）

「御主人様！？あ、あの……」（ステラ）

「ん？どうした？」（悠莉）

「ぶるあああああああ！ー」（えみりあ）

「ぶるあああああああ！ー」（ゆーと）

「ぶるあああああああ！！」（るみあ）

「ぶるあああああああ！！」（なぎさ）

「これは、一体……」（悠莉）

「はい。御主人様が仕事に行ってる間にマガシ様が来て、それでみんな真似を始めてしまっ……」（ステラ）

「レンヴォルト・マガシイイイイ！！」（悠莉）

覚醒済みのHP吸収のエクステ強化したホオズキを片手に、鬼の形相でマガシを探し出す。

「ご、御主人様アアア！？」（ステラ）

マガシと悠莉の決闘は、三日も続くと予想されたが、半日で決着が付いたらしい。

なぜ半日で決着が付いたのか。それは二人の決闘を止めたのが、幼稚園児×4だからである。

子供も大人も含めて、みんなの人気者。その名も……（後書き）

幼稚園児はおじさんがお気に入りだそうです（笑）

なんでもかんでも子供の遊びと言えば良い訳ではない(前書き)

久々過ぎる更新……

そして、銀魂とオンドウル侍さんの仮面ライダードラゴンナイト
翼を抱いた鏡の戦士に登場するクライスが登場します(＜|＞)

なんでもかんでも子供の遊びと言えば良い訳ではない

「はあ！？ネグレストは犯罪だぞ！！」(クラウド)

「うるさい！仕事だから仕方ないだろう！エミリアたちを任せる。」
(悠莉)

事の発端は、悠莉に仕事が入ったこと。それで、悠莉は幼稚園児×4をクラウドに預けようとしているのだが、それをクラウドが拒否しているところである。

「めんどくせえんだよ。その年頃のカキは……」(クラウド)

「お前は経験者だろ。」(悠莉)

「ステラに任せりゃ良いじゃねえか。」(クラウド)

「荷が重すぎる。故にだ。」(悠莉)

「わかったよ。めんどくせえけどな。」(クラウド)

「頼むぞ。金輪際マガシに近付けさせるな。」(悠莉)

「テメツ、それが理由か！！」(クラウド)

前回にマガシの口癖が移った事に、悠莉は非常に腹を立てている。元々犬猿(笑)の仲である悠莉とマガシ。それが更に悪化した。

「頼むぞ。」(悠莉)

悠莉は仕事先に向かった。

*

「たく、なんでガキ共の御守りしなきゃならねんだ……」（クラウド）

「おっさん！あそぼー！」（えみりあ）
クラウドの足を揺する。

「あそぼー！！」（ゆーと）
エミリアと同じ。

「ちょ待て！わかった、わかった！！たくっ……、めんどくせえなあ……」（クラウド）

クラウドは頭を掻く。そして、適当に端末を操作する。すると、ある広告を見付けた。

『ペット探し、浮気調査、子守り等々。何でも承ります。何でも屋、万事屋 銀ちゃん』

（何でも屋かぁ……）（クラウド）

早速アクセスするクラウドであった……

*

「リトルウィングって、かなり有名な軍事会社ですよね？それが、

「なんでウチに……」(新八)

「軍事会社つっても、人手不足なんだろ。でなきゃ、ウチに頼まねえよ。」(銀時)

「そうアルヨ。それぐらい理解しろよ眼鏡。」(神楽)

「なんだよ!! 僕だけバカ扱いじゃねーか!!」(新八)

「騒がしいな……」って、お前らが万事屋銀ちゃん?」(クラウチ)

「おっさん誰アル?」(神楽)

「俺はクラウチ・ミユラー。お前ら三人を雇ったモンだよ。」(クラウチ)

「つーか、そんな毛むくじやらで前見えてんのか?」(銀時)

「天然パーマに言われたきゃねえよ!!」(クラウチ)

「ンだとテメエ! 天然パーマ舐めてンのか!? ああ! ?」(銀時)

「銀さん!! すみません、クラウチさん……」(新八)

「まあ。それでも、非常識なお客さんは何人か見てるからな……」(クラウチ)

「本当にすみません……。あの、依頼ってなんですか?」(新八)

「ああ、そうだ。依頼は、ガキ四人の面倒を見て欲しいことだ。ま

つ、要するに子守りだ。」（クラウチ）

「子守りかよ、めんどくせえ……」（銀さん）

「お前ら、何でも屋だろ？めんどくせえのはわかるが……」（クラウチ）

「はい。わかりましたよ、クラウチさん。」（新八）

「かーっ。ホント、坊主は礼儀正しいな……」（クラウチ）

「いえ、そんな……」（新八）

「おっさん、新八は眼鏡が本体アル。眼鏡に話しかけるヨロシ。」
（神楽）

「なんでそうなるんだよ！！」（新八）

「とりあえず、ガキ共頼んだぞ……」（クラウチ）

*

「ここか、ガキ共の部屋は……」（銀時）

そして、万事屋三人は部屋に入った。

「誰ですか？」（クライス）

「だれー？」（幼稚園児×4）

「めっさかわいいアル!!」(神楽)
ユートを抱き上げる

「神楽ちゃん!? 神楽ちゃんは抱き締めちゃダメ!! 死んじゃう!!」(新八)

「おねーさんつよい!!」(ゆーと)

「って、喜んでるんだけどその子!!」(銀時)

「締め殺す気ですか!?!というか、何なんですかあなた方は!?!」
(クライス)

「僕たちは、クラウドさんに頼まれて……」(新八)

「あー……。クラウドさんが言ってた追加ってあなたたちですか……」(クライス)

「あの毛むくじゃら、どんだけめんどくせえんだよ……」(銀時)

「とりあえず、お互いに頑張りましょう。ええっと……」(新八)

「クライスです。」(クライス)

「頑張りましょう、クライス君。」(新八)

「よし、早速遊ぶアル!」(神楽)

「あそぶー」(ゆーと)

「なにしてあそぶ？」（えみりあ）

「じゃあ、ケーキがあるから……」（銀時）

「え？いきなりおやつタイムですか？」（新八）

「第一回、チキチキパイ投げ大会開始イイイイ！！」（銀時）

「よっしゃああ！始めるアル！」（神楽）

ホアチャア！！の掛け声と共に、新八に向けてケーキを投げる

「オイイイイ！！なんて遊びをするのオオオオ！！」（新八）
回避

「うるせーな。ガキの遊びと言ったらパイ投げ大会だろ？」（銀時）
「あんな危ないパイ投げ大会があるかア！！それn」（新八）

「てやー」（えみりあ）
新八に向けてプチケーキを当てる。

「オイイイイ！！やっぱり、銀さん達の真似しちゃったよ！！」（
新八）

「ちよつと、教育によくn」（クライス）

「うりゃああ！」（ゆーと）
クライスの顔面に向けてモンブランを投げる。

クライス、戦闘不能。

「たのしー」(えみりあ)

「ねー」(ゆうと)

「ほれ。」(銀時)

ショートケーキをルミアの頭上から落とす。

「きゃああ!」(るみあ)

「銀さん!!子供相手に何してるんですか!?!大人げないですよ!」(新八)

「新八、自分の足元見ろ……」(銀時)

「え?」(新八)
下を向く。

「…………」(なぎさ)
新八の足に、チョコレートケーキをくつつける。

「ホアチャア!!」(神楽)
新八の顔を蹴る。

「ぐぎやああああ!!」(新八)

新八、戦闘不能。

「よくやったアル、ナギサ!」(神楽)

「…………」(なぎさ)

嬉しそうな表情になる。

そして、この大会は約一時間も続いた……

*

ちょうど、パイ投げ大会をやっていた時間、シズルの元に一つの通信が入った。

よかった。繋がったか…… （悠莉）

「悠莉？どうしたんだ？」（シズル）

いや……。夕方位には帰れると思っていたのだが……。見誤った

…… （悠莉）

「まだ、終わりそうにないのか？」（シズル）

ああ、だから…… （悠莉）

「エミリアたちの迎えに行ってくれ。ってことか？」（シズル）

ああ。すまない、頼んでいいか？ （悠莉）

「わかったよ。」（シズル）

ありがとう。なるべく早く、終わらせるから。 （悠莉）

そして、通信は切れた。シズルはちょうど、野暮用でクラッド6に来ていた。

（本当に、母親として板についてきたな……）（シズル）

クラウチに幼稚園児の場所を聞いて、迎えに行く事にした。

*

「ここ、だよな……」（シズル）

シズルは一気に不安になった。子供達が遊んでいる割には、かなり音がおっかないからだ。

「エミリアたち、そろそろ時k」（シズル）

「ホアチャアアア！！」（神楽）

シズルの顔面にホールケーキをスパークリングする。

シズル、戦闘不能

「あ……」（幼稚園児×4）

「どうしたアル？」（神楽）

「お父さあああん！！」（幼稚園児×4）

「神楽アアア！！何しでかしてんだよオオオオ！！」（銀時）

「アレぐらいで倒れるようじゃ、この子たちの親にはふさわしくないネ。」（神楽）

「うつ……。なんですか……。今の悲鳴は……」(新八)

新八、復帰

「おい！！大丈夫……か……」(悠莉)
目の前の光景に啞然。

「あの、どちら様ですか？」(新八)

「お母さん！！」(幼稚園児×4)

「クリームだらけじゃない！何をしたの！」(悠莉)

「パイなげたいかい……」(えみりあ)

「一体、誰が……」(悠莉)

「……」(幼稚園児×4)
皆、銀時に指をさす。

「結構素直ですね……」(新八)

「子供だからね……」(クライス)
クライス、復帰

「なるほど、わかった……」(悠莉)
倒れているシズルを起こす。

「う……。悠莉……？」(シズル)

「大丈夫か？悪いがエミリアたちを頼む……」（悠莉）

「あ、ああ……」（シズル）

「そこのお前もだ。」（悠莉）

「あ、はい……」（クライス）

シズル、クライス、幼稚園児×4退出

「じゃあ、俺たちも……」（銀時）

「待て。お前には話がある……」（悠莉）

「あの、殺気を感じるんですけど……。尋常じゃない殺気を感じるんですけど……！」（銀時）

「あんなのを目の当たりにしたら、誰でもそつなるだろ……？」（悠莉）
手をポキポキと鳴らす。

「ちよつまっ！？お母さん！？」（銀時）

「歯アくいしばれエー！」（悠莉）
拳を振るう

「新八ガードー！」（銀時）

「え？ぎぐああああー！」（新八）
直撃して、殴られた方向に吹っ飛ばされ、床に眼鏡が落ちた。

「あ……」 (悠莉)

「すいまつ せんでしたアアア!!」 (銀時)
土下座。

その後。悠莉は新八に謝罪した後、張本人であるクラウチをみっちりとしばいたらしい……

なんでもかんでも子供の遊びと言えば良い訳ではない（後書き）

「さあく者アアア！！コラボキャラに何しでかしてるのオオオオ
！！」（幽真）

「オンドウル侍さん、作者は俺たちが責任を持ってボコすね」
（デユオ）

「ホントにすみませんでした……」（作者）

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4809w/>

リトルウィングの非日常

2011年12月1日16時51分発行